



1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

1980

社会主義は資本主義の影として
これからも存在せざるを得ない
岩田昌征 3

ソ連・東欧体制の崩壊と宇野理論
大内秀明 8

自然死でもいいではないか？
加藤哲郎 17

観念的期待の呪縛
鎌倉孝夫 25

左翼は滅びない？
小阪修平 30

負の遺産を受け継ぐこと
塩沢由典 37

「君子豹変」のすすめ
柴谷篤弘 45

マルクス主義の「乗り越え」か「清算」か
白川真澄 48

「左翼」批判のスタイルについて
竹内芳郎 54

感想・私にとつてのマルクス
鶴見俊輔 57

「第二の戦後」にお知らせするためにマルクス主義理論の共同検証を
中野徹三 58

「憎悪の哲学」たえず使い古されてきた議論
橋本剛 68

左翼の生きのび方について
降旗節雄 77

私がマルクス主義者である理由
窪田小彌太 86

自然死でもいいではないか？

加藤哲郎（国文学教授）

えた論理を欠落させた純粋資本主義の原理論では、理論の有効性を問われるのは当然だろう。工業化社会の原理論であるために、とくに『資本論』がそうだが、モノづくりの物的対象化の労働だけに価値形成が限定されている。また、サービス労働は不生産的な空費にすぎなくなり、流通・サービスや技術、経営などの意義が過小に評価され、資本主義経済の機能的な側面が無視されている。その反面で、資本の所有と階級支配が一面的に強調されたのも、工業化社会の封鎖体系に特有な理論的ユガミとして批判されなければなるまい。

ソ連・東欧体制の崩壊は、たんにスターリンやレーニンの批判にとどまらず、マルクスの根底的な批判、とくに『資本論』の批判的再検討を要請している。しかし、それは左翼のイデオロギに死を宣告することではないと考える。むしろ二世紀の脱工業化社会にむけて、いかに一九世紀以来の知的遺産のひとつとして、マルクスの思想と学説を批判的に継承するかにあるのではなからうか。

『左翼の滅び方について』（以下、『滅び方』として頁数を記す）の主題は、著者によれば、「天皇制なし天皇制が象徴している日本の思想と政治の風土」「権威の日本的な作用様式」（三〇―三二頁）だといふ。「左翼≠天皇制」というのは、別に目新しい見方ではない。天皇制の問題は、近著『社会と国家』（岩波書店）で論じてあるので、ここでは、私自身が受けとめた『滅び方』のメッセージに即して、二つの観点について述べる。第一に、マルクス主義の問題、第二に、知識人の問題を。

だが、それぞれを論じる前に、自分自身のスタンスを述べておくべきだろう。私自身はすでに『季刊窓』誌八号に寄稿した「東欧革命の日本の受容」で、関氏が『滅び方』で問題にした学問世界を分析し、『ソ連崩壊と社会主義』（花伝社）にも収録した。『滅び方』には、ベルリンの壁崩壊後の日本の「左翼知識人」の二類型がでてくる。一つは「東欧革命後一夜にして『民主主義者』に変身した人々」ないし「東欧革命を契機に前衛主義者から『民主主義者』に変わったマルクス主義者」、もう一つは「未だに『いや、マルクスやレーニンは間違っていない』といはれる人々」。類型化は抽象化であるから、何らかの捨象や偏差は不可避であるが、多分私は、どちらかといえば前者にくくられるのだろう。

私自身は、「右翼」左翼図式をあまり好まず「自らを左翼と認める者」(一八頁)とは必ずしもいえないが、「世間」の方では「左翼」とみなすだろう。「東欧革命後一夜にして変身」したわけではないが、「社会主義者」「マルクス主義者」として「永続民主主義革命」を唱えてきたのであるから、正確を期すために、前著『東欧革命と社会主義』(花伝社、一九九〇年)の韓国語版序文に付した自己規定を、再録しておこう。

「私は、以上のような意味で、民主主義者であり、地球市民主義者である。しかし同時に、マルクス主義者であり、社会主義者でもあると、自負している。ただし、私のマルクス主義は、ソ連・東欧で国家宗教になつていて「マルクス・レーニン主義」とも、中国や朝鮮北部に今なお生き残っているそれとも、異なつてゐる。強いて言えば、主要にはカール・マルクスとアントニオ・グラムシから、現代的に意識のある思想として理論を自主的に汲み上げ、再構成した、『ネオ・マルクス主義』ないし『ポスト・マルクス主義』である。私の社会主義も、一九一七年から今日まで世界に現存した、いわゆる社会主義國のそれとは、異なつてゐる。私の社会主義は、暴力革命と結びつくプロレタリア独裁も、民主集中制で組織された共産主義前衛党も、絶対的真理と理解されたマルクス・レーニン主義も、前提とはしていない。それは、国家権力の奪取を至上目的とし、労働者階級の代表を自称する政党が国家権力の全体を掌握し、生産手段の全般的国有化と命令的計画経済を労働者・民衆に強制するような『国家主義的社會主義』とは、むしろ対立する。私の社会主義は、文字どおりの『社会』中心主義である。つまり、国家権力に凝集され、政治家と官僚制に傾倒されてきた民衆の民主主義的共同の権勢力を、社会自身にとり戻し、市民社会の自己統治に自己規律にくみかえていく、長期のプロセスである。パリ・コミューン期にマルクスが述べた『国家権力の社会による再吸収』という意味での、『民主主義的社會主義』であり『市民社会主義』である(『ソ連崩壊と社会

主義』花伝社、一九九二年、一四〇―一四一頁、その前後をも参照)。

私は、こうした立場から、関氏の論旨のいくつかに共感し、いくつかの点で疑問を持つ。共感する一つの論点は、「市民革命の理念の再確認と再定義」(一九二〇頁)についてであり、「社会中心のデモクラシーの再定義」(五三頁)である。この点は、右の短い引用でもわかるだろう。『東欧革命と社会主義』で詳しく展開してある。

もう一つは、「近代政党政治の論理が崩壊しつつある」(五二頁)という論点である。この点は、私の別著『社会主義と組織原理 I』(窓社、一九九九年)、『コミンテルンの世界像』(青木書店、一九九二年)の主題の一つであり、「世界」一九九二年二月号に発表された「究極の政変への表裏のあとで」で詳論した。別に関氏の議論に触発されてではないが、期せずして同じ論点を提起していた。それは、関氏の二八世紀のサロントと居酒屋とカフェで育てられた啓蒙と革命の精神(二二頁)への注目と、私の「フォーラムと円卓会議による革命」という東欧革命観に、重なりあう部分があるからだろう。

疑問点については、私の受けとめた『滅び方』の二つのメッセージに即して述べる。第一のマルクス主義との関係では、私は、先に自己規定したような意味で、「東欧革命を肯定しながらマルクスを否定しない」一人である。無論それは、マルクス解釈学や、マルクスの全面受容に組み入るものではない。個人の認識能力には限界がある。ネオ・マルクス主義は、マルクスに知的刺激を受けながら、例えば、ハイパーアズバ・ラロウのようにコミュニクエーション理論やヘンリ二論の領域で、あるいはN・ブリンガスやI・ウオラステインのように国家論や世界システム論に紐替えて、現代世界を解明してきた。マルクスを知的源泉の一つとするが、絶対化はせず、その歴史時・理論的限界は当然と考える。ウエーバートやフーコーも参考にすると、サルトやラッサールの役割も否定しない。私は、主として国家論や社会

運動論の領域で、そのように思考し行動してきた。

関氏によるマルクスの生産力説・生産力信仰批判は、正当だと思ふ。だがそれは、マルクスを含む一九世紀社会思想の、多少とも共有する限界であらう。それは、社会進化論に発し、単線唯物史観や近代化論で完成される「進歩」や「科学」の觀念には含まれた限界であった。それが「科学的社會主義」唯一の絶対的真理」として受容され、ソ連のような実験國家で國教化し増幅された問題が、二〇世紀末の地球環境・生態系の危機のもとで、問われているのだと思ふ。無論そのことで、マルクスが免罪されるわけではない。マルクスの唯物史観の公式や所有階級一元論は、当然に相対化される。ましてや階級闘争論や國家論は、マルクス自身が断片的記述しか残していない。もともとネオ・マルクス主義の世界は百家争鳴であり、「ブルジョア政治学」の助けなしには展開不能であつた。だから私は、ロバート・ダールの多元主義論やジョン・ロースの正義論を高く評価する。N・ボジビオの仕事や最近翻訳されたF・カニンガム『民主主義理論と社會主義』からも多くを学んだ。無論、関氏の『野蠻としてのイエス社会』や『過剰社會』論からも知的刺激を受けている。マルクス批判は、マルクスを超えることによつて、果たせたいのである。

私は、「革命とは他人ではなくまず自分を愛することなのだ」(二頁)という関氏の提言に共鳴し、自分もそうありたいと願う。だが、マルクスを「ユダヤ系なるがゆえに大学教授への途を閉ざされることかなければ、手放して資本主義を警美した可能性が大きい人物」「内発性が欠けている」(三頁)とは評価しない。「内戦の論理を除くと、マルクスには革命論も社會主義論も、否、資本主義論すらないだ」(二七頁)とも思わない。例えは『フランスにおける内乱』の『國家の社會による再吸収』のアイデアからは、グラムシとともに、自分なりに学んできた。「晩年には充分に時間にあつたはずの彼がついに『資本論』を完成させなかつた」(二四頁)ことで、マルクスを責めようとは思わない。マルクスに私生活がいても、事

情は同じである。「等身大のマルクス」と今後もつきあい、知的源泉の一つとして読み続けたいと思ふ。こ

れらは、次の第二の論点とも関わる。

第二の知識人論について、私は、「左翼や知識人の『業界』(六十七頁)の存在を認める。企業社會と共通の「天皇制的イデオロギー」があることも確かだ。私自身の生活世界も、かなりの部分が「業界」とオーガニゼーションしてきた。知的退廃や「排他的徒党的身内意識」に対しては、自分なりに批判してきたつもりである。同時に、大藏龍介氏から『現代と展望』(第三〇号)誌上で批判された、私自身の日本マルクス主義國家論史総括の視野の狭さのような問題点については、率直に認めざるをえない。

しかしそこから、「知識人」や「社会的分業」一般を否定しようとは思わない。大学や大學教員の存在意義も否定しない。その全体が減びるべきか？ 私はそうは思わない。私にとって、とりわけ学生との日常的對話は、マルクス以上の知的源泉であり、日本型「サロン」の一つと考えている。それは、究極的には、人間観の問題かも知れない。私の立場は簡單である。SPDベルリン綱領風に言えば、「佳藝觀でも性悪觀でもなく」である。

関氏はフランス思想に詳しい。私自身はマルクスを全面否定せず、ハイパーマルクスやルパンにも関心を持っているという意味で、「ドイツ的な発想の枠内」(五〇頁)かも知れない。だからといって、フランス思想に門戸を開きつくりはない。葉來思想やアジア、イスラムにも関心は持っている。「ルパンとして」の學問には、そうした開放性と自己限定が不可欠であると信じる。そしてそれは、関氏が日本の左翼が買収した二つの功績」(三三頁)をあげ、「マルクス主義の崩壊は啓蒙主義の遺産の崩壊につながるものではない」(三六頁)という精神と、そんなに大きく異なるのだろうか？

東欧革命とソ連崩壊で、私自身の知の一部を含め、「ある種の知が崩壊」したことは事実である(五六頁)。

それが「業界」の概念にまでいたらず、イエ社会的階級性、差別性を引きずっていることは、その通りだろう。だが、関氏が「日本の知識人なるものが、日本の急速な近代化と、それとともに成長した学校制度と、ヤナリスムの付随にすぎなかつた」(五七頁)というほどには、私は「日本の知識人」に懐疑的ではない。天皇制やイエの問題を自分なりに考えるにあたっては、丸山眞男や関氏を含む「日本の知識人」の研究者類に頼らざるをえない。知識人と大学の制度化が、同時に「タクソバ化」をうみ、「大知識人」が生まれず「論壇」が衰退しているにしても、こうした問題自体を対象化し、「自分の使う道具の中身を検討」(四頁)する知識人たちも、いないわけではない。

いや問題は「社会主義」や「マルクス主義」を論じた「左翼知識人」だ、と関氏はいかもしれない。しかし、関氏のいう「日本の左翼」の内包、外延は、いま一つはつきりしない。イエ社会的「世間」ではおそらく関氏も「良賢の左翼」に入れられるだろう。自衛隊海外派兵に反対したり、従軍慰安婦に心を痛めたり、雑誌「世界」に登場するのは、この国ではいまや「左翼」なし「サヨク」なのだから。「世間をさわがす」言説自体が、「左翼知識人」のレッテルを覚悟しなければならぬのだから。「マルクス主義」がシヤナリスム市場から消え、政党再編が進行しても、それはイネオロギイ的言説や政治的力関係の基軸と布置状況が変わっただけである。ポツポツが「どのような社会にも常に、社会の上部において現状を維持しようとする人びと、下部において現状を変えようとする人々が存在するだろう」(後扉雄編著「大転換」密社、一九七頁)というような意味で、言論間のヘゲモニー闘争、権力への距離により示差化する構造物自体は変わらない。それがいつまで「業界」単位の日本の形態をとりつづけるか、「右翼-左翼」「保守-革新」と呼ばれ続けるか、「成長-環境」や「男性-女性」が基軸となり伝統的對抗とどうオーヴァラップするかは、不確定であるにしても。

私の認識では、関氏が「見事に滅びよ」と呼びかけた(挑発した?)日本の「左翼知識人業界」は、すでに一九八九年の東欧や九一年ソ連の崩壊のはるか以前から、すでに内部から衰弱し瓦解していた。「自己批判」以前に若者や市民から見離され、「長年の構造不況業種」(七頁)だった。関氏は、「昔からマルクス主義者に議論をしかけてきた……、こう言ったら彼らはどう言うだろうと、たえず気にしなければいけなかつた」(四一頁)という。それは「過期期待」「過剰反応」ではなかつたか？ 私自身は、関氏が糾弾する意味での「左翼業界」は、衰弱死なし自然死しつづつあると考えている。「知識人業界」にもそれなりの「市場原理」はあり、「まともな商品」を創作できない職業人は淘汰されざるをえない。私の知る「マルクス主義業界」では、現にそれが急速に進行しつづつある。とすれば、そこに「見事な滅び方」を求めることに、どんな意味があるのか？

私にいわせれば、関氏は、「滅びよ」への反応をそんなに気にする必要はない。本書に寄稿した頭ぶれから、その「衰弱」度合いを確かめればよい。密社はきつと「左翼」と目される人々に幅広く寄稿を要請しただろうから。関氏の「挑発」にのる「良賢の左翼」のみを相手にすれば、それでいいではないか？ 「右翼」に「左翼対立図式の崩壊」が本当なら、関氏は、「成長主義-環境主義」なり「ネオ・リベラル-マルクス主義」に基軸をずらし、あるいは図式そのものを放棄させる言説で、自己のヘゲモニーを飛躍すればよいのである。

私自身は、「社会主義」や「コミンテルン」を批判的研究対象としてきたから、必要に応じて新旧「左翼」をも相手にするが、関氏の「過剰発展」説による「持続可能な成長」批判(「世界」九二年六月号)に学びつつ、同時に「持続可能な成長」枠内でのローマニアの「第一次地球革命」(朝日新聞社)や佐和隆光の「新しいリベラリズム-グローバル・ケインズ主義」(「尊厳なき大國」講談社)をも評価する。それが本

当に日本の労働時間短縮・自由時間創出につながるなら、ソニーの盛田昭夫会長も支持するにやぶさかでない。
 私かさしあたり「左翼知識人」に望むことは、ソ連や共産党やマルクスについての「見事な滅び方」ではない。つまり、高望みはしない。せめて自分自身の過去の公約発言については「市民」としての責任をとり、「自己批判」でなくてもいいから「自己実現」してほしいということである。「左翼」としてよりも、「知識人」としての職業倫理で、誠実に発言し行動してほしいということだけである。

観念的期待の呪縛

鎌倉孝夫 埼玉大学教授

1

何か積極的にコメントをしようと考えていたわけではなく、とにかく一度読んでおこうかと思つて会社の依頼に応えたのでしたが、一読して、「これはコメントがむずかしい本だ」と思いました。

この本で指摘されていることに首肯できることも多々あります。現実の事態を自己の論理で解けなくなつたら、自己の論理を根本から見直し、ダメならはつきり破産宣言するというのは、論理に生きようとする者としては当然のことです。自己批判や総括を何もしまさま、褒飾して何の責任も感じない、というのは、まさに皆さんのいわれるように知的退廃だ、と思います。

でもこの本で関さんが提起されている主題は「左翼の滅び方」という主体に関わる態度、姿勢、実践の問題なので、関さんについて「そのくらの主体性は日本の左翼知識人の中にもあるのではないか」と思いますが——ということになるか。「自分の問題でしょう」と無視するか、開き直るか

KAROSHII 過労死

過労死をめぐって 日本労働組合総連合会編

国際版 日本文+英文 定価2580円

英語版 定価1545円

日本語版 窓ツクレット3 定価200円

WHEN THE "CORPORATE WARRIOR" DIES
経済大國日本のもうひとつの真実を世界は知っているか！
《過労死110番》から緊急レポート

- 1 過労死とその背景
- 2 自死と産業労働者の過労死
- 3 女性と産業労働者の過労死
- 4 外国人労働者の過労死
- 5 外国人労働者の過労死
- 6 女性労働者の過労死
- 7 過労死と労働組合
- 8 過労死と労働組合
- 9 過労死と労働組合
- 10 過労死の医学的考察

- 1 Karoshi and its Background
- 2 The Auto Industry
- 3 The Service Industry
- 4 An Advertising Agency
- 5 A Foreign Worker Succumbs to Karoshi
- 6 A Female Employee of Motor Bank
- 7 The Life Style of Japanese Workers
- 8 The Labour Unions
- 9 Law Concerning Karoshi
- 10 A Medical Study of Karoshi

窓社

窓ツクレット5

左翼の滅び方について

関野 曠野著

定価980円

尾形に滅びよ——と叫びかける。なぜか

もしも、左翼が健在ならば熱戦できたら戦争の部。

論 文 左翼の滅び方について

右翼-左翼対立図式の崩壊 過去の遺物となった知識人なる存在 変身と頑迷の同質性 左翼知識人に残された道 なぜマルクスなのか マルクス革命論の反動性 出口は市民革命の理念の再読解と再定義 マルクス主義はなにをえたか なぜマルクス主義は滅布したか われわれの前にある問題

付 言 主題はどこにあるか なぜ「尾形に滅びよ」と叫びかけるのか 日本の左翼が目撃した二つの状況 おわりに 日本の知識人と社会科学

インタビュー ● 論争よ、超これ！日本の知識人と社会科学 右翼-左翼図式の崩壊と知識人の現在

なぜ、マルクス主義者は反論しないのか 右翼-左翼図式の崩壊と知識人の現在

在 マルクスの革命理論について 国家と市民社会の問題 マルクス主義の日本の受容の問題性 日本の社会科学の未来

窓社

批評・『左翼の滅び方について』

- 1992年9月 1日第1版第1刷印刷
- 1992年9月14日第1版第1刷発行

● 編者 窓社編集部

● 発行者 西山俊一 株式会社 窓社

● 発行所 〒169 東京都新宿区百人町4-7-2

TEL 03-3362-8641

FAX 03-3362-8642

● 印刷 製本 佛平河工業社

© Mado-Sha 1992

ISBN4-943983-60-X